

第5章 札幌トモエ幼稚園における 基礎的人権教育の実践

第7節 生きる力を生み出し楽しい人間関係を創造する社会共同体的実践

トモエでは、毎日多数の親たちが参加している。子どもも大人もそれぞれが自分のペースで活動し、心地よい大家族的な生活空間を創造している。

互いに毎日顔を合わせていると、家族のような親しさが生まれる。まずは好きな人、相性の合う人から関わり始める。自分の直感を信じ、親しくなれそうな人と関わっていけるように、親たちに指導している。その心地よさを基として、少しずつ人間関係の幅が広がっていくことになる。子どもだけではなく大人たちも、人と関わり合うことを体験的に学習することのできる精神環境を創造しているのである。

大家族的なリラックスできる生活環境の中では、建前や世間体に囚われる必要はない。誰もがありのままの自分であることができる。誰でも、長所もあり短所もある。失敗を繰り返したり、人を傷つけてしまうこともある。誤解やトラブルも当然生じる。自らのあるがままを認めることは、相手のあるがままを認めることでもある。人の過ちを許すことができなければ、自分の過ちも許されないものであることを、トモエの家族は日々の体験の中で学んでいるのである。

親たちは日々、子どもの素直さや優しさに触れ、学んでいる。大人たちもまた、素直に自己を表現し、本音で話す心地よさを体感している。なるべく率直に自己表現しながら、互いのあるがままの個性を尊重し、相手に配慮するように心がけ、それが人間の尊厳であることを確認しつつ歩んでいる。

大人たちが率先して楽しいことを素直に表現するように、あらゆる場面で意識して生活環境を創造している。日常的な活動はもちろんのこと、子ども祭り・家族レクリエーション・トモエ祭り・感謝祭・お別れパーティーなど、年に一度の大きな行事に至るまで、大人自身の心が躍動し、楽しんで活動している。親たちの創造力は、様々な場面で発揮される。皆でアイデアを出し合って企画を進めたり、有志が協力して大掛かりな出し物を演じたり、凝った衣装を用意して奇想天外な仮装で盛り上げたり。何かをやりたい人がまず手を上げ、賛同する人が集まって、次第に輪が広がっていき、協力し合って企画を実現させていく。「この指とまれ方式」と呼んでいるが、これはトモエの伝統になりつつある。

母親同士では、昔の井戸端会議のように、互いの悩みを相談し励まし合う親しい関係が自然に発生している。二階にある事務室が母親たちの溜り場になることもある。

親しくなった家族の間では、親身になった支え合いの例が多く見られる。日常のちょっとした外出の時、親の体調が悪い時、親族が入院した時など、子どもを預けたり預かったりして、お互いに助け合っている。家族の事情によっては、スタッフも協力して朝夕の送迎をしたり、早朝や夜遅くまで子どもを預かることもある。

互いの家に遊びに行ったり来たり、時には泊まったりして、家族間の交流は深まっていく。課外活動も活発化する。親しい家族が集まって、パーティーを開いたり、ピクニックやキャンプに出かけたり、スキーや温泉旅行など、自主的な交流を持っているグループが多数ある。夫婦間で互いの家族の問題について相談し合うこともある。

心許せる「親友家族」の存在は、活動領域の幅を広げ、人間関係を深め、生きる喜びを生み出していく。いつまでも信頼関係で結ばれる親友家族は、卒園後も何十年も親しい関係が続いている例が多

い。互いに支え合い助け合っていくことのできる親友家族を多く創っていくことができるように、家族全体を具体的に援助し指導しているのである。

個々の個性を認め合い、配慮して、誠意をもって関わり合うことは、トモエの確固たる精神環境として根付きつつある。「障害児」「健常児」という区別的かつ差別的な言葉をトモエの生活から無くしたのは、1986年である。人は皆それぞれ個性的であって、すべての人が何らかのハンデを心身に持っているものである。完璧な人間など、どこにもいない。子ども親もスタッフも、自分自身の弱さや欠点を認め、他者のハンデを認め、それぞれの足りない部分を補い合い、助け合って生きることができるよう成長しつつある。

トモエは信頼と共生の場になりつつあるといえるだろう。

人は「群れ」の中で生活する動物である。現代では核家族化が進み、地域社会の教育力が失われつつあり、人を育てることができない社会になっている。群れることができなくなり、その結果、個々が孤立して、不安定な精神状況を創り出しているのである。

トモエでは、群れて生活する環境を回復し、教育力のある地域社会の再構築を目指して歩んできた。トモエの生活空間は、大家族的な親しい人間関係を基盤として、楽しい日々を創造しつつ、生きる喜びが新鮮に湧き出さずような環境となりつつある。

人は互いに支え合い補い合い、助け合って生きるものである。個々が孤立し人と関わり合うことのできない文明社会の中では、物質偏重文化の危険を感じ人間の心の行方を思考する生活文化を重要視しているアメリカの農業共同体「アーミッシュ」や、熱帯原始森の中で円形の大きな一つ屋根の下で共同生活を送っている南米アマゾンの「ヤノマミ族」から学ぶべき点が多い。

園長は、トモエの精神環境の創造のために、常に現場にいて親子やスタッフを見守り、目をかけ心をかけ、新鮮な空気を贈ることができるように、努力しつつ前進し続けている。

事例（４７） 卒園生が我が子をつれて親として参加する

トモエでは、まず大人自身が日々の生活を楽しみ、創造的に生きることを最重要視している。親が生き生きと自分の人生を生きることによって、そのエネルギーは子どもに強く伝わる。子どもにばかり夢や期待をかけるのではなく、大人が自分自身に夢をかけ、期待をかけて生きることが最も大切なのである。

トモエのレクリエーション大会では、親が子どもと一緒にゲームを楽しむ。子どもそっちのけで盛り上がっている親たちもいる。恒例の仮装パレードなど、大人が主体的に楽しむことができるように、一日を企画しているのである。

次のレポートは、レクリエーション大会を思いきり楽しんだ親子の感想である。

七月に入った頃だろうか、お弁当の時間に「レクの時、何するの？」という会話が聞こえてきたのは、レクってみんな仮装するっていうやつだよ、ハヤトだけ好きなものに仮装すればいいかなあ、とその時は他人事だった。

夏休み明けになるといよいよという感じで、レクの話もだんだん具体化してきていた。どうしようかなあ、やっぱりやろうかなあ、柔道着きて髪しばって金メダルして、ヤワラちゃんじゃ安易すぎるかなあ、と思いつつパパに相談してみた。すると、「ママがヤワラちゃんならパパは何になればいいの？・山下？ヘーシング？」。やっ、やる気だな。それじゃ、ヤワラちゃんは無理だな、ママは黒

帯だけど、パパは白帯、これじゃまずいな。その日からの夕食の会話は、もっぱら仮装についてになったのであった。

家族三人で同じものになろうと言うと、ハヤトは「いやだ、ウルトラマンコスモスになりたい」と言い、家族一緒には、あえなく却下され、何がいいか決めかねている時、たまたま、ダイの家に遊びに行ったのです。その時、家で仕事をしていたダイのパパが登場し、私は失礼ながらも「原始人が似合いそうだな」と感じてしまったのです。(ダイパパごめんなさいね)

原始人という案は出ていたのだが、二人ではインパクトに欠けると迷っていたのだ。そこに強力な救世主の登場、すぐにダイママに相談し、原始人ファミリーが決定したのであった。それから衣装や小道具を作ったりしていると、どんどんイメージがふくらみ楽しくなってきた、遂にはあの「かつら」にいきついたのであった。

当日は、多少の不安の中であつた原始人も、予想以上に笑いをとり、気分は上々。まだ脱ぎたくないなあと思っていたら、「このまま次のゲームしようかな」とパパが言った。似た者夫婦ってこのことなのね。これに味をしめて、また来年も…。でも原婦人を超えるものができるかどうか…。でも、原始人が似合うってどういうこと？

仮装以外でもがんばってしまいました。勝負と聞けば負けたくない、新聞バトルもついつい全力で挑み、どこからか「中村夫婦には近づくなー」という声が聞こえてきたのでした。馬跳びが終わった後には、足がピクピクして、日ごろの運動不足を痛感したのでした。筋肉痛にはならないように、ストレッチしてから寝ました。もうぐっすりでした。子どもより親の方が楽しんだ一日でした。

私は園長と千恵子先生といると、子どもの頃に戻ったような不思議な気持ちになる。(私は園長の幼稚園の卒園生です。園長も千恵子先生も変わらないなと思うけど、家でその頃の写真をみると、やっぱりそうとう変わっているのだった。三十年も経ったんだから当然ですよ。)

トモエに来ると、幼児期に過ごした環境に似ていることもあり、子どもの頃のことをよく思い出す。幼稚園のことだったり、小学生の頃のことだったり、真っ黒になって傷だらけになって、暗くなるまで遊んでいた時のことを。この、自然の中でポーズと過ごすひとときが、とても心地よく、今の生活の中でなくてはならない時間になりつつある。でもそこには、大人の顔をした自分がある。その大人の顔も、レクリエーションの日にはだんだん子どもの顔になっていったのではないだろうか。久しぶりに日常を忘れて楽しんだ一日だった。

レクリエーションが終わって家に帰ってからハヤトに「何が一番楽しかった？」って聞くと、楽しそうな、嬉しそうな、何とも言えない顔で「ママ！」と言ったのでした。

ああ、親も参加するっていうことはこういうことなんだなあ実感したのでした。これからも、楽しいことやいろんなことが待っているんでしょね。とても楽しみにしています。やっぱり、参加するのが一番楽しいですよ。

事例(48) お母さんたち、お願い、幸せになって！

園長の著書の出版を記念して、父母有志が自主的にパーティーを企画した。当日は、在園卒園家族が大勢集まり、創造的な一日となった。普段子育てで大忙しの母親たちも、仲間と共に協力し合って、自ら主体的に行動し、自己の才能を發揮した。その充足感から湧き出する生きる喜びは、母親たちの大きなエネルギーとなる。活気にあふれる毎日が創造されることになるのである。

このパーティーを企画した有志のひとりである、ある母のレポートである。

私が、手のかかる二人の子どもを抱えて、行事などに参加して手伝うことができるのは、家でケーキなどを焼いたり、子ども達の父がトモエに来て、面倒を見てくれる時、例えばトモエ祭りの当日だけとかで、前もっての準備、お手伝いは全然できなかった。森の会の総会に1回もまともに出たことない、普段お母さん達とおしゃべりをしていてもとぎれる、園長、スタッフにゆっくり相談もできない。1日に1回、「ねえ、お母さん休憩したい。こーひー飲ませてー。」とやっと飲めるくらいがいいところ。

そんな私が、お母さんバンドに、練習、本番、しかも楽器演奏という形で参加できたなんて、自分でも驚く。今までも何回か、「一緒にやろう」と誘われていたが、史織は、私が自分の事以外のものに真剣になれるのがいやらしく、家の中でもピアノをついつい集中して弾こうものなら邪魔して、「こっちの歌弾いてー」ということになる。だから、音楽を作っていく気持ちよさなんか忘れてしまいそうだったし、いつも何かにふさがれている感覚でいた。

そもそも、佐藤さんに「コーラス隊に入って」と誘われて、「私はやりたいけれど、史織と慶太しただいだから、途中でできなくなるかも」「じゃあ、高田さんドタキャンありで、できるところまでネ」と、ごくごく軽くこの話を受けた。それが本番10日前。

そろそろ練習開始ということで、「コーラス隊のハモる音、取ってくるよ私！」なんて、少しヤル気を出したら、その日から子ども達はPM7:00位から寝てくれるし、夫は普段あまりない出張で数日間留守。一人だけの時間ができた。押入れのダンボールから五線譜を引っ張り出し、コーラス隊の音取りだけをするつもりが、何回かCDを聞いているうちに、「このメロディ、響きいいわぁ。ベースの動きもカッコイイわぁ」と血が騒いできて、他のパートも音取りをしてしまった。みんなでこの曲を完成させることを想像しながらCDを聴き、ピアノに向かう。たったそれだけで、とても楽しい...楽しい。

いよいよみんなと一緒に練習。あれ？史織、遊んでいて、全然私に近寄ってこない。慶太もなだめられながら、お菓子を食べたりしながらも遊んでる。(史織と慶太と遊んでくれた方々、本当にありがとう。) やった！練習できる！しかも、ピアノに向かい、コーラス隊の指導している。うれしい！(鬼軍曹とか顔が怖いとかいわれながらネ)

5日間、1日1時間半程度の練習。結局私は、音に厚みを出すため、急遽キーボードをやることにしたが、コーラス隊、ボーカル以外は打ち合わせ程度の練習しかしていない。やっぱりお母さんバンドも『できる人が、できる時に、できるだけ』のトモエ流なのだ。でも、なんて幸せな日々！

本番は、さすがトモエの母、いざという時のものすごい底力を感じた。曲のできは、皆さんご存知のとおり。

そして園長のお話。「お母さん達、お願い、幸せになってくれ」

あの時、私が一番心に残ったことばです。そして、このことばは、1ヶ月前だったらこんなに心の中に響いてこなかった。ここ1ヶ月、いろんな人との関わりの中で、つらかったり、苦しんだり、励まされたり、自分と向き合い、見つめなおし、夫と話す時間が多くなったり...。そうした中で、今回の出版記念パーティーがあり、お母さんバンドに参加することができた。

私は少しずつ自然体になり、楽になってきている自分に気付きはじめています。それは、園長、スタッフと気軽に話ができるようになったこと。(今までできなかった。肩に力が入ってたのかな。)トモエで、子ども達と一緒に遊んでいても、本当はお母さん達とおしゃべりしたいのに、行事のお手伝いしたいのに、などと思いながらいたのが、ちゃんと向き合って遊べるようになったこと。そして何

より、史織が私に執着しなくなった。子どもにはわかるんだなあ、自分が無意識に緊張していたり、不安になったりしているのが。それが今は肩の力がぬけたのか、楽になり、リラックスして、何かにふさがれていた心が開放されてきた自分がある。それは、いろいろな人との関わり合いの中で、いろいろな人の心の深さ愛の深さを感じた、今回のパーティーがあったから。

トモエにきて、まる2年。やっと私は、はじめの1歩を踏み出せた。でもこの2年があったからこそ、1歩を踏み出せたんだと思う。

また『The perfect fan』やろうよ。あなたも。

事例（49） 真冬の親子ふれ合い雪中キャンプ

毎年2月には、親子ふれあい雪中キャンプが行われる。親子で雪と戯れ、マイナス10度の屋外で豪華バーベキューに舌鼓を打つ。雪の露天風呂にゆったりとつかう。ワクワクドキドキの連続である。楽しい時を親子で共有し、多くの家族と交流して、親友家族を一組でも多く創ることは、家族にとっての生涯の財産となるのである。

このキャンプに参加した、ある女性からの手紙を紹介する。

「今年はねえ、また新しいことをやろうと思っているんだ。川村さんにも体験してもらおうかな。まっ、乞う御期待だね。」

園長の弾んだ声に、「私にもできることってなんだろう？」と、ちょっと胸をときめかせながら受話器を置いたのです。

昨年はプールのような巨大な雪穴を掘って、星空を仰ぎながら楽しめるバーベキュー広場を作った園長でしたが、今年はなんと、雪の露天風呂を作ってしまったのですから、本当にオドロキでした。人を驚かせたり楽しませたりするのが大好きで、意表をつく遊びを考え出し、実際にやってしまう園長は、マツタク遊びの天才です。

あの日、夕日が沈むころからドンドン冷え込んで、トモエのあのあたりはマイナス10度にはなっていたはず。その夜空の下での大花火大会の後、雪の中の露天風呂に入った子どもたちは大はしゃぎ。湯煙の中で大騒ぎでしたが、その子どもたちの様子を楽しそうに見ていた園長が、いきなり「吹雪だ！吹雪！」と、両手ですくった雪をお風呂の子どもたちに振りかけたのですから、裸の子どもたちは大騒ぎ。イタズラ好きの園長の面目躍如でした。

全身で遊び、遊びの楽しさを知ることは、「生きている」ことの喜びを実感することだと思います。また、その喜びを大勢の友達と共感することで、喜びは何倍にも膨れ上がっていくことになるのですが、そうした感動は、友達へのやさしい気持ちや信頼感、さらには自分自身への自信にもつながっていくのだと思います。こうした野太い感動が子どもたちに育っていく素地が、トモエの日常の活動の中に生きていて、それがすごいことだと思います。

園長やスタッフの皆さんのバイタリティにも感心しますが、若いお父さんやお母さんたちにも、今回は改めて感心しました。

雪遊びでピシャピシャにぬれた手袋や靴下を、面倒がらずに実にこまめに取り替え、また遊びに出していました。飽きることなく雪遊びに飛び回る子どもたちの伸びやかさ。「もう、いい加減にしないで。」などというお説教じみた言葉はなかったですね。

幼少期に体当たりで遊ぶ、そのエネルギーこそが、将来人生に立ち向かっていくときのバネとなり、

「生きる力」になっていくことを思うとき、トモエの豊かな自然環境と、園長をはじめとするスタッフの方たちの体当たりの真剣な活動は、かけがえのないものと思います。

多忙な日々にあっても、内外の専門書にも目を通し、人間教育の本来に思索をめぐらしながら、自分を高める努力をしている園長に、敬服しました。延びていく生命である子どもに向き合うためには、対するこちら側も伸びる努力を怠ってはいけません。その姿勢は、子どもにもその親にも反映するものと思います。

まもなく3月。卒園式の準備で華やいていることでしょう。どうぞ、お元気で。

事例（50） 私の両手にたくさんの宝物があふれている

トモエまつりは、卒園家族や地域の方々も交えて行われる、盛大なお祭りである。食事、喫茶、手作り品、リサイクル品、子どもゲームコーナー、コンサートなど、盛沢山の内容で、毎年たいへんな数の人でにぎわう。

このトモエまつりは、特に準備の過程が重要である。親たちが多くのことを感じ、考えながら、協力し合い、ぶつかり合う。親たちが人間関係を広げ、深めていく、絶好の機会なのである。この体験的な学びが、親たちの精神的な成長に結びついている。

次のレポートは、トモエまつりを通して大きく変わっていった、2児の母の熱い思いである。

今はもう晶子とふたりのトモエ通いにもすっかり慣れたけれど、半年前までは私達家族のトモエでのメインは、今一年生の周平だった。彼は赤ちゃんの頃からトモエで育ち、私もその隣りで色々な経験をした。まだ白組、まだ赤組、そう思っているうちにいつの間にか緑、アツと言う間に青組というめくるめく日々の中に、私には多くの仲間ができた。

特に青組の年は濃い一年だった。カメラ片手の一年は生涯忘れられない一年になった。信頼しあえるたくさんの仲間と、卒園の何カ月も前から涙を流して別れを惜しんだ。卒園式の一週間ぐらい前になると、「時を止められる方法が何かあるなら、どんなことでもしたいよね」なんて言葉を本気で交すほど、みんなといる時間が惜しかった。そんな仲間達は春にほとんどがトモエを去った。大人になってから初めて、あんな切ない別れを経験した。大好きだった人たちが、がらんとしたトモエにはもう彼女達の声は聞こえない。北海道の南の端へ行ってしまったひと、遙か海の向こうへ行ってしまったひと。電話で話しては涙があふれた。声を聞くとすぐ隣りにいるようで、すぐに会いにいけるような気がして。そんな気持ちがしばらくつづき、何だか私にとってのトモエの春はとても淋しいものだった。

それでも出版記念パーティーがあったり、PRの公開講座で司会をさせてもらったりと忙しくしている間に、少し遅いスタートをきって、トモエに向かう私の足も軽くなった。学校の役員との両立にまたまためまぐるしい毎日が続き、いつの間にか夏はおわり、メインイベント「トモエまつり」の日が近づいた。私はかれこれ9年トモエにいるけれど、行事で窓口なんて大変なものになったことがなかった。こどもが小さくてできなかったのと、他にいくらでもやってくれる人がいたのだ。しかし今年トモエの中もガラっといれかわり、いままでやってくれていた人たちは多くが卒園してしまっただけで、しかたがない。順番なのだ。少しも自信なんかなかったけれど、私は食事と喫茶の窓口になった。

予定では規模縮小のはずだった。喫茶も以前ほど凝ったものではなく、食事のおまけのような感じ...の予定だった。しかし、準備の段階から今井さんのケーキづくりに対する気合いがすごかった。

(先日のトモエだよりでまた感動して熱い思いがこみあげ、やはり私も文章にすることにしました。) 悲しく切ない別れにしぼんでいた心に、声をかけてくれる人がいて、新しい仲間と新しいバザーがはじまろうとしていた。いままで頼っていた人のいないバザー。不安で一杯だったけれど、準備や打合せから今井さんと私はずーっと笑っていた。

私はその昔、もっとネガティブだった。自分のことなんか好きじゃなかったし、いつも先々が心配だった。それが、気がつくといつも心の底で「どうにかなるさ」と思っている。何か行事が終わると「いやぁ、あれがよかった、これがよかった」と笑顔で盛り上がり、仮装でトモコと組んでは「とてもよくできている」と自画自賛する。長い時間をかけて、私は自分で自分を褒めることができるようになった。決して無理をしてがんばらなくても、心通わせた人たちが私を認めてくれた。いくら失敗や間違いをしても、暖かいフォローで許してくれた。その人達との関わりやわが子との関わりで、私は自分が好きになりはじめた。ありのままの私を出したら決していいお母さんではないのだけれど、みんなと本音で話せることに気がついた。するとやはり心が通い会うのだ。人と本当に気持ちをひとつにするっていいものだなあとつくづく感じた。目の前で「お疲れさま～」と声をかけあうみんなは、本当に心からの「お疲れさま」をいっている。職場の挨拶なんかではない。みんな本当に大変だったけれど、お互いによくやったとほめあっているような、そんな「お疲れさま」なのだ。

バザーはもちろん各コーナー大盛況のうちに幕を閉じ、もちろん今井さんの生ケーキは売切れ続出で、喫茶もいつにない売上げをだした。初めは想像もつかなかった新しい形。それでも隣りで笑いあってくれる仲間がいて、自分も底力を出してがんばろうと思える。それってすごく幸せだ。バザーから何週間もたった今も気持ちは熱い。こんな思いができるなんてラッキーだ。窓の外に子供コーナーのにぎやかな風景が見え、会場の中をゴミ袋を持ってゴミの回収をする人の姿が見え、すぐそこでは大きな鍋からカレーをよそう人がいる。そしてすぐそばにはお互いをフォローしあって働く喫茶の仲間がいる。離れた場所で作業していても、それぞれ役割に応じて仕事は違っても、何だかみんなひとつになった気がした。みんな自分の持ち場を精一杯やった、そんなふうに思えた。

けれどそんなあわただしいバザーのかげには、今年はこどもが小さくて何もお手伝いできなかったひと、初めてのバザーで何が何だかわからないまますぎたひと、やりたくてもなかなかできないひと、ほんのできることだけでも協力してくれたひと、色々なひとがいたことでしょう。でも、どうか無理をせずに、自分のペースで、いつかその力を発揮するその時まで、大切にしておいて。みんなみんなすごい力を持っている。必ず出番がやってくるのだから。「あんなふうにはできそうもない」と私だって思っていた。それでもいつか自分もそうになれる。可能性を信じて。そして誰かとわかりあえるってすごくいい。トモエにいる時間は自分次第でいくらでも宝物をふやせる。今私の胸にあるこの熱い思いは、幾つ目かの宝物に違いない。辛い事も悲しい事も絶対に無駄にはならない。いつかトモエを去る時、私の両手にたくさんの宝物があふれていることを期待して。

事例(51) 愛すべき人たちとの信頼関係

日常的に多くの家族とふれ合い交流することで、互いに支え合い助け合うことのできる「親友家族」を多く創ることができる。子どもを預けたり預かったり、悩みを相談し合ったりして、深まっていく関係は、卒園後もずっと続いていく例が多い。これは家族にとって何にも勝る宝物となる。

次の文は、親友家族を創ることの喜びを綴った、ある母の手記である。

これから先にも後にも、私が楽しい時にも苦しい時にも、揺れ動いている時にも、どんな時にも、戻る場所はトモエなんだと思う。

私がこの世で一番に愛する者は、当然として私の家族達ではありますが、トモエに通うようになってから、私には“愛すべき人”とよべる人達が増えました。トモエで出会った彼女も、そんな愛すべき人達の中の大切な一人です。本当はもっとずっと前に、私は彼女に対して嬉しかった気持ちを伝えれば良かったのだけど、なんだか照れくさくて、ちょっと時間がたっちゃった。だけど、あのことは本当に良い体験だったと思うんだよね。日を追うごとに、いろんな場面において、ますますそう思うよ。

そもそもの事の始まりは、昨年、長男が卒園する際、トモエで「卒園にむけて青組さんの親と園長のお話し会」の中で、なるべく学校の役員は引き受けた方がいい、といった内容があり、私は向こう見ずにも自分の置かれている状況も考えずに…。だけど決して軽い気持ちだったわけではホントなかったのだけど、不思議な力に後押しされるように？ “はい…私やります！”と、最初の懇談会の日、手を挙げてしまった…。(なんてアホだろう…) 全校生徒600人以上…1年生だけでも4クラス120名以上もいる…。その中で、先生も生徒も親も、知っている人は誰一人いない！？ おまけに、私は人前に出ると、極度に緊張するクセがある…。

家に帰った途端“やっぱりやめればよかったよ…、後悔は決して先には立たないから後悔と言う”なんて言ったところで、後の祭りだった…。

夫に話すと「大丈夫？」と言うなりクスクス笑ってるし、長男は私がちょくちょく学校に行く聞いて大喜び！（彼は今のところそーゆータイプ。）不安顔でコチコチになっている私に、園長は「引き受けちゃったって?! アハハ…」とか言って、ニヤッ!とイタズラを企んでいる時の子供みたいな顔して笑ってるし-。

もう…、もう、こうなったら後には引けない!

でも、心に迷いを持ちながら何かをすると、つまづいた時に人のせいにはしてみたり、挫折するとなかなか立ち上がれなかったりするもの!? 案の定、私もそうだった。長男が入学して2学期も中間頃、トラブルからストレスを抱え、自分の力だけではどうしても浮上することができず、ある日の夜、この文で最初に話した彼女に頼って電話してみた…。彼女はとりあえず私の話を最後まで聞き、その後こう言った。(私は心のどこかに、当然やさしい言葉が返ってくるのを期待していたと思う。)

「甘えるのもいい加減にしまっ!! 誰のためにしてるのか、誰にどう思われてるとかより、自分の子供が通っていてお世話にもなっている学校だよな? そんな気持ちでしてるんなら、まわりの人達だって、逆にありがた迷惑だと思うよ! 感謝の気持ちだって忘れてるんじゃない? …いったい自分自身はどうしたいの?」

それから、相談した問題については、彼女が経験して良かった例をあげながら短くアドバイスをしてもらい、電話を切った…。

ちょっと放心状態になっていた私に、彼女からのメールが届いた。落ち込むと足元ばかり見る私の性格をフォローするように、“私のためになりますように!”と、引用の文だけど、とっても素敵な文が送られてきた。目が冷めた感じというか…、なんだか泣けた…。オイオイ泣いて、鼻までかんだ。

この場合、彼女は私に話を合わせてやさしく励ますだけということもできたはずなのに…、あえて彼女は、私がより一層ぬかるみから早く出られるよう、大変な方を、しかもそのことを承知したうえで、嫌な役を引き受けてくれたのだと思う。結果、そうすることで、私の本音を引き出してくれた。

もちろん、このようなことは、相手の状況を理解しようという気持ちを持ち、信頼関係があってこそ成立するのだと思いますが…。

それから、彼女とは、その後にお互い会っても、「よっ！久しぶり」「元気かい？」とか、全然、普通なの。なんだか笑っちゃうよーっ。言いたいことを言い合ってスカッとしている、トモエの子供達の世界みたいで（笑）。トモエに通うということは、親である私たちにとっても、もうそれだけで凄いことなんだよおっ！と実感した出来事だった。

私の夫は私に相当甘いので、もしもまわりにいる人が甘い人ばかりになっては、私自身、相当、身勝手になってしまふところ…。そんな信頼おける友人達に囲まれ、今日もまた一歩前進したい気持ちが沸き上がる！

学校の方はそれからどうなったかというと…。もちろん自信復活である！最後の最後にクラス行事を企画し、当日は司会を担当して、長男のクラスの子達と大盛り上がりで、「次はビンゴゲームだあっ！！イエ～イツ」（注：私）とか言ってんの…。（トモエの楽しさとは比べられないけど。）役員仲間のお母さんに、「言いたい事言わせてもらえて良かったよ」なんて言ってもらった時は、なんか嬉しかった！

私が学校で聞く側になるよう心がけられたのも、ひとえに、家で私の話に耳を傾けて聞いてくれる夫と、トモエで園長はじめスタッフ、それから…信頼おけるトモエでの友人達が、私の言いたいことをいっぱい聞いてくれたおかげなの、ホント！

本当、愛すべき、トモエ生活である

事例（５２） トモエは不思議な世界？ 現代の奇跡？

トモエには、多くの見学者が訪れる。入園希望家族の他にも、大学教授、医師、報道関係者、教育関係者、学生など、様々な立場の人々である。

見学に訪れた人は、トモエで創造している社会共同体的な生活環境と、多彩な活動や親しい人間関係に驚いて、様々な感想を言葉にし、質問を投げかけてくる。

「一見すると、誰がスタッフで誰が親なのか、わかりませんね。大人と子どもの関係も自然で、どちらが大人でどちらが子どもか、一瞬わからなくなる場面もありました。皆、対等な一人の人間として、互いの個を尊重して関係が創られているのだということがわかります。」

「子どもだけではなく、大人も自由に参加すると、トラブルが起きるのではないですか。親があれこれと要求してきたり、スタッフを批判したりしないのですか。スタッフにとっては毎日が参観日のようなもので、親の目に耐えられなくなるのではないですか。」「親同士のトラブルも多く起きるはずで、それらを解決できるのですか。支え合い助け合うどころか、人間関係が成り立たなくて崩壊してしまうのが、現代の人間関係の常でしょう。このような実践が存在し続けられるということは、とても不思議な世界です。」「宗教団体でもないのに、トモエのような社会共同体的な生活環境が存在するなんて、信じられません。現代の奇跡です。」

これらの言葉は、実際に見学を訪れた人たちの口から聞いた言葉である。

互いに支え合い助け合うことのできる精神環境を創造し続けることができているのは、人間を総合的に探究してきたこと、自分自身の良心に少しでも素直に従おうと、自分自身の弱さと闘い続けてきたこと、多くの人々の生き方に耳を傾けようと努力し続けていること、などによって成り立っているのである。

事例（５３） 私たち家族の「心の子宮」

トモエは互いに支え合い補い合い助け合って生活する、社会共同体的な生活環境になりつつある。ある母親は、二子目の妊娠と出産を通してそれを実感したといい、詳細なレポートを書いてくれた。

先日園長がコピーしてくださった渡辺久子先生の論文『乳幼児精神保健の新しい動向 - 心を守り育てる子宮のような母子臨床をめざして』を読ませていただいた。現代の母子の精神生活の深刻さに、ある意味無力感を抱いたのと同時に、その中にこれこそ必要であると出てきた「心の保育器」「心の羊水」「心の子宮」のようなもの…。もし一年前だったら、私はこの言葉を実感をともなわず読み進めていただろう。けれども今の私は、「私にとって、そして私たち家族にとって、トモエは、心地よい子宮そのものだ」と、ハッとしたのである。

三月十四日、私は二人目の子、拓朗を自宅で出産した。それから一カ月経つか経たないかで、午後のトモエに行った時のこと。赤ちゃんコーナーで寝ている拓朗を見て、江美ちゃんのお母さんがこう言ってくれた。「『妊娠しました』って時から知ってるから、かわいいんだよねー」。

そうなのだ。私の今回の妊婦ライフは、トモエとともにあった。去年の五月に藍と体験入園、そして七月の頭にはもう北の沢に引っ越し&正式入園していた。その後すぐに妊娠。なので、私と夫は、「お腹の子は、トモエに来たくて生まれてくるんだね」とよく話していた。

四年前、藍がお腹にいる時は、私は自分が妊婦として接せられるのが嫌だった。知り合いからも見知らぬ人からも話題は「予定日はいつ？」「男の子なの？女の子？どっちが欲しいの？」「お腹、さがってきた？」と妊娠のことばかり。私は、自分が鈴木宏美という個人ではなく“妊娠しているだけの人”になってしまった感じがして悲しく、しょっちゅう泣いていた。ところが今回は違った。トモエのお母さんたちとの話題は、妊娠・出産のことがほとんどだったというのに…。

ある日突然私の顔を見て、「男だね！」と断言する人。会うとどうしても私のお腹の大きさの話ばかりになる人。雪の日も坂を下りて歩いてトモエに来る私をいつも気遣ってくれる人。いろんな反応があり、それがまた楽しかった。たくさんのお母さんが、不自由な私の代わりに藍と付きあってくれた。

子どもたちの反応もさまざまだった。「タイホするぞ！」とロープを持って追いかけてきても、「藍ママ、お腹に赤ちゃんいるから引っ張られるわけにはいかないの」と言うと、急に神妙な顔になる。「お腹に赤ちゃんいるの？さわってもいい？」となでてくれる子、「もう生まれた？もう生まれた？」とメートル級のお腹の私に会うたび聞く子…。論文にあった「安心できる依存対象、心の保育器や羊水としての、実家の母や近所の暖かい女性らの親心」…。トモエのお母さんたちや子どもたちの応対が、私にとってのそれだったのではないだろうか。

「妊娠しました」から始まり、生まれる前の日まで、私はトモエに通っていた。トモエの玄関前から、あの素晴らしく不思議な虹（太陽の周りを二重に囲み、さらに鏡のように反対方向にも一部映っていて、一時間半も出ていた）をたくさんのお母さんたちと共に見ながら（ちなみに第一発見者は私）「生まれるかも！」なんて笑っていたら、翌朝本当に産んでしまった。

拓朗誕生の二十分後に園長から電話が来た。「生まれたかーい？」。夫、「あ、はい、無事。男の子でした。今、へその緒切るところなんです」。「えっ！それはそれは…」。もちろん、園長に「生まれそう」なんてこちらから連絡しているはずもなく（予定日は一週間先だし）「なんか絶妙のタイミン

グ…。園長、生まれたの分かったんじゃない？すごいね…」と感心してしまった。

その日のうちに藍とトモエに顔を出した夫は、スタッフをはじめ、たくさんのお母さんから「おめでとう」と声をかけてもらい、はたまた、「名前は快晴ってのは？(by 園長)」「虹介でしょ、やっぱり」(by おやじ)「虹太郎」(by 西村さん) などなど。そんな風に、拓朗は生まれた時からトモエに迎えてもらった感じがする。

私自身の育った環境を言えば、一人っ子、両親は共働き、親戚づきあいや家族ぐるみのお付き合いにも縁が薄かった。そのせいか、私は人にあれこれ言われるのも嫌だし、助けを求めることも苦手な人間だ。でも、トモエに来てたくさんのお母さんたちに助けってもらって、私は少しずつ変わったのだと思う。そして今回の出産で、私はやっと素直に助けを求めることができた。

一つには、ななちゃん。兵庫からトモエに実習に来ていた彼女にお願いして、春休みに入ってすぐ、産後五日目から三週間、家に住み込んでもらったのだ。食器洗いや食事作り、何より藍の相手を頭が下がるくらいよくしてくれた。藍を連れ出してくれると、昼も夜もない授乳で寝不足の私は本当にありがたかった。藍も、藍の主張に根気よく付きあってくれるななちゃんに安心しきっているようだった。この頃、産後を乗り切るのに必死だった私と、その変化に対応しようと頑張っていた藍に、ななちゃんは最高の人材だったと思う。自分が家族以外の人と一緒に暮らすようになるとは想像したこともなかったが、やってみると、本当に助かる。トモエのお蔭で、私は自分の殻を一枚破れたように思う。

今回の出産を通して知ったのは、トモエのサポートや関係性は、幼稚園という枠をはるかに超えていて、他のシステム、コミュニティではあり得ないのではないだろうか？ということ。トモエ・コミュニティならでは、だと思う。春休み中、スタッフは毎日ミーティングや新学期の準備で登園していて、そのためにトモエに行くななちゃんと一緒に、藍も毎日トモエに通っていた。スタッフがミーティングしているところにも一緒にいて、園長やスタッフにたくさんのアテンション(注目)とアタッチメントをもらっていたようだ。「今日は私の膝の上に長いこと乗っていたよ」「体をつかってふざけたよ」と園長から藍の様子を伝える電話があった。園長が、藍のことを気にかけてフォローしてくれているのが本当に嬉しくてありがたくて涙が出た。「私はそこまで余裕がなくて…」と言うと「そんなの当たり前だよ」。そんな園長の心遣いを藍も感じたのだろう。もともと「園長のバカ」と言ったり、おしりをたたいたり親しみをもっていた藍だが(この親しみの例…すいません、トホホ)、さらに気持ち近づいたようで、ななちゃんから、「今日、私から離れて『園長に甘えたいの』って言って、園長の膝に乗ってたんですよ」と聞いた。私の知らない藍の姿…。

園長やスタッフのあたたかさの中で落ち着いていた藍だが、産後三週目くらいから、私や夫に理不尽なことを言ったり要求するようになってきた。そんな藍に、特に私は冷静に対応しきれず、腹を立て、怒ることが多くなった。二人目が生まれる上の子をフォローするようにはよく聞くが、心がついていかないし、行動に移せない。「やばい！ どうしよう」。それで、拓朗が一カ月になるかならないかで、私はトモエに行ったのだった。私自身の心の平和のために。園長に相談しよう…。

「お母さんの身体が回復してきた頃でしょ？ ちゃんとしてるんだよ。もう出してもいい頃だって分かってんだから。すごいねー」。園長は教えてくれた。理不尽なことを言うのは、私や夫を試しているのだと。考えること、じゃれることが大切だよと。「私がよくやるのは、わざと子どもが逃げるくらいぎゅうーっと抱きしめる。おっぱいだってさ、『ほれほれ、藍も飲んでよ』って押しつけるくらいしてごらん」。おもしろかった。なぜならその日の帰り道から、藍との関係が変わったから。彼女の要求に対して、どうユーモアをもって対応しようか？、笑いながら返せたのだ。そうすると、

彼女も変わる。ちゃんと向き合おうと意識するかしないでこんなに違うんだ、と驚いた。しかしながら、それが長く続かないところが私らしいところで、風邪で体調が悪くなると、また逆戻り。そして園長に聞いてもらう…。トモエの二階に上がるだけで、コーヒーを飲みに行った足で、あるいは立ち話でも、ふと相談事ができるこの環境…、ありがたいです。

トモエのサポート、あたたかさに包まれているのは、私と藍の母子だけではない。我が家では夫も十分それを享受している。今では、「俺にとって園長室は最高のカフェだ」と言うくらいトモエになじんでいる彼だが、最初の頃は多少疑問に思うこともあったようだ。たとえば、その日の出来事を私が話すと、「そういうけんかの時、そばにいるお母さんは止めないの？」「スタッフは何してるの？」「物を最初にとった子のことを怒ったほうがいいんじゃない？」「手を出さずがそんなにいいのだろうか？（藍こそそうなんだけど…）暴力を認めることにならないのだろうか？」など。実際、世の中のお父さんは（兄弟がいれば別だが）、自分の子どもがけんかをしている場面を見たことがない人がほとんどだろうし、母親から話を聞いただけでは、実感がわからないのだとも思う。うちの場合はその後、私の話を何度も聞くうち、また家族 day や土曜の小学部で子どもたちの様子を見たり、「トモエ便り」から感銘を受けたりして、トモエを理解していった。加えて、彼がその時期めぐりあった河合隼雄（カウンセラー）の著書を読むと、「この考えはトモエに通じている」と思うことがあり、彼は河合隼雄経由でトモエを一層理解したようだ。

そして今回の出産後、仕事を一週間休んで、藍と平日のトモエに通った夫。皆に「おめでとう」と声をかけられ、彼の方は名前も顔も知らなくても、相手のお母さんは藍を知っているから親しく話しかけてくれる。その感覚を彼は「おもしろいなあ」と言っていた。今までにない、経験したことのないコミュニティなのだそうだ。

「今日は、ちゃんを抱っこしながらちゃんをおんぶした」だの、「藍、ちゃんともめた時、家では見たことのないいいじわるな顔してた」など、いろいろ経験したようだ。トモエでは、毎日一緒に過ごすことで、子どもを多面的に見ることができるなあ、と思う。最初は「乱暴な子」としか思わなくても、その子のさまざまな場面を見たり、接したりするうちに、「乱暴なことをすることもある子」、「もちろんしない時もあり、もっと別の面をたくさん持った子」になってゆく。だから、トモエのお母さんたちは、どの子に対しても視線があったかいと本当に思う。そういった見方を、我が家では夫も持てた。すごい財産だ。

我が家の場合は、トモエの近所ということもあって、非常に恵まれた例だと思う。「トモエに来てよかったよね」と日々実感している私たちが、それでも、安定した育児ができていくかというところ…。私たちがさえそうなのだから、世間のお母さん、家族は一体どんな風に、どんな気持ちで、産後やその後の日々を過ごしているのだろうか？

新聞では虐待の記事。夫の母はよく言う。「また虐待で子どもが死んだよね。友達とも話してるさ、『信じられないよね、こんなかわいい子を虐待するなんて』って…。」私はこの話題になると、相づちにも困る。正直に言うと、私は、虐待されて亡くなってしまった子どもよりも、そのお母さんの方に心がいてしまう。自分を重ねてしまうのだ。彼女はどんな状況にあったのだろうか？どんな気持ちだったのだろうか？どんなに彼女は孤独だったのだろうか？と。そして、虐待、鬼母と非難するマスコミや、「信じられない」と言う世間の人々が、一体どれくらい想像力をはたらかせているか、解決策を考えようとしているか、実際に自分の身近なお母さんに具体的に手をさしのべているのか、と心の中で問うている。

夫が義母に言った。「お母さんはさ、俺が小さい頃、自分でお風呂に入れたことないって言ってた

じゃない？ 近所の さんがいつも入れてくれてたって。昔はそういう社会があったんだよ。お父さんが遅く帰ってきても、助けてくれる人がいたんだよ。でも今は、近所づきあいもなく、お母さんたちは子どもとずっと二人っきりでさ。子連れでのんびりできる場所もなくてさ...」。

最後に...。三月の末、トモエで小学部のお泊まり会があり、ななちゃんから情報を得た藍は、「トモエでバーベキュー食べるから、晩ご飯いらぬ」とトモエに行っていた。仕事帰りの夫が、トモエで藍を拾って帰ってくるようになった。その時の夫の談。

「会社で嫌なことがあって、それ引きずって帰ってきたんだけど、トモエで車降りた途端、別世界だったんだよ。空気が違うって言うか、風が吹いていて、暗い夜の森と空が目に入って静かだ。その中で浮かび上がるようにトモエの窓に明かりがついていて...。で、中に入ったら一変して、子どもたちがワーキヤー走り回ってて楽しげで、生命力あふれる空間というか...。ビジネスの世界って、冷静さが求められる世界でしょ。だからうらやましいような、うまく言えないけど、「こっちが本当の世界だ」って思ったんだよ。園長と小学部のお母さんたちが、『藍ちゃんのお父さんも食べてって』って言ってきて、藍はというと、園長の膝で串食ってるし...。何だか感動して、園長といろんな話をしてきたさ...」

これは、私たち家族の心の子宮の姿です。心の子宮が、現実に存在している一場面です。

< 参考資料 >

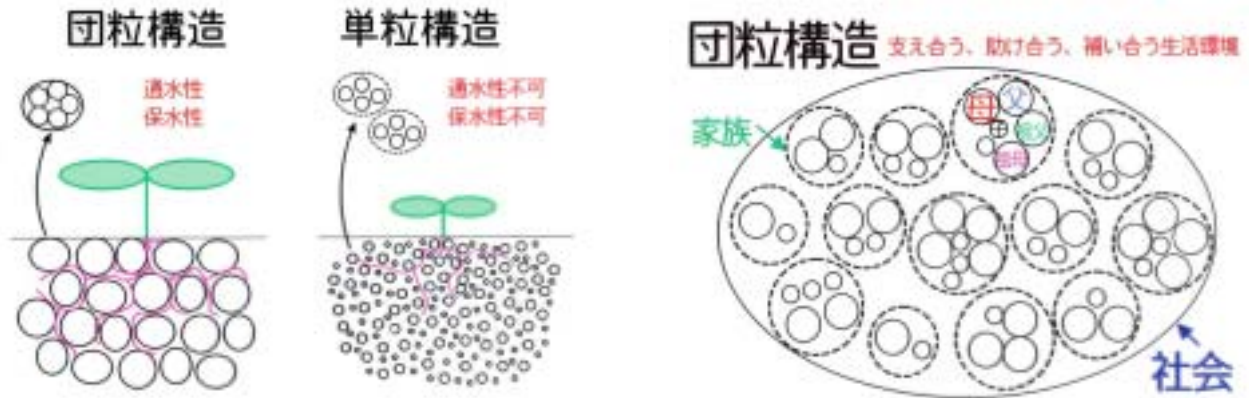
* 木村尚三郎・東京大学名誉教授によるコラム『開かれた共生を目指せ』より（北海道新聞1995年1月1日付）

『古代ローマ時代、地中海沿岸には長方形の都市がたくさん造られた。冒頭のエーグ・モルトも、その形を模して造られた中世の城壁都市である。方形都市には横一本、縦一本のメインストリートが設けられ、二本の交わる十字路がフォーラム＝英語のフォーラム＝であった。フォーラムという言葉は今日、シンポジウムと同じ意味で多用されるが、もともとは都市の「十字路」のことである。

ちなみにシンポジウムという言葉は、プラトンの作品『シュンポジオン』が「饗宴」と訳されるように、「ともに」(シン)「酒を飲む」(ポシス)という意味のギリシャ語から発している。古来、交通の要衝であった地中海の沿岸諸都市では、明るく温かい開かれた十字路で、さまざまに異なった人びとがワインを飲み合い、心を開いて集い楽しみ、知恵を出し合ってきた。

そのような「十字路の共生」、すなわち明るい十字路での開かれた共生以外には、先行き不透明の今日、未来を拓く手だても、これからの繁栄もない。』

* 人間として助け合い補い合う生活環境を創造する、トモエの団粒構造的な生活環境図。



土壌学的に考察すると、「団粒構造」の土壌は、粒子が大きく柔らかで、有機質が多く含まれる。保水性、通水性に富んでいる。作物が健康に育つ土壌である。「単粒構造」の土壌は、砂地、粘土質で、乾燥しやすく、作物が育ちにくい。土質の改良が必要な土壌といえる。

人間社会も様々である。父子家庭、母子家庭。父親が留守がちな家庭、母親が留守がちな家庭、両親の留守がちな家庭。子どもが多い家庭、少ない家庭、三世同居家族。家族の人間関係が良好な家庭、ぎくしゃくしている家庭。近所の人間関係に気を使いすぎる環境、隣人との心地よい関係がある環境。交通量が多い環境、少ない環境、等。家庭環境によって、生活を楽しく創造できるかどうか左右される。

現代社会は、土壌と同じように、個々がばらばらに存在して互いに関係を持つことができない「単粒構造」の社会になりつつある。他者との関係はもちろんのこと、家庭内でも個々が孤立している。夫婦も子どもも祖父母も互いに無関心で、それぞれが手前勝手に生活しているのである。

単粒構造化した社会の中では、人間関係の希薄な個は、自己の世界に没入するのみで、他者に配慮したり助け合ったりすることができない。自らが苦境に陥ったとしても、手を差し伸べてくれる人がいないのである。心の病、自殺、犯罪などが増加していくのは、当然の成り行きであるといえよう。

人は本来、群れて生活する動物である。まずは、ひとりひとりが夢や希望を持って自分の人生を生きることが前提となる。個々が生き生きとして自己の存在をふくらませると、家族との接点が密になる。さらに、それぞれの家族が自己存在をふくらませ合い、地域社会との関係を活発化すると、社会は団粒構造化していく。

トモエでは各家庭を支え、大人も子どもも助け合い補い合い、お互いに育ち合える生活教育精神環境を創造し続けているのである。

< 参考文献等 >

『教会共同体の研究』 榊原巖 (平凡社)

『親と子の主体形成を支える保育共同体の構築』 明星大学修士論文・宮武大和

「人間とは何だ!?・ ~ 奇跡の脳・自己を探す感動の旅」 TBS (01・11・17)

「人間とは何だ!?・ ~ 脳の奇跡・失われた愛を探す感動の旅」 TBS (03・11・29)

「アーミッシュの世界」 NHK (91・3・7)